

大学図書館はこれからどうなるのか？



はやし
林 義勝

明治大学図書館長、
マンガ図書館長、文
学部教授

たけうち ひろや
竹内 比呂也

千葉大学副学長、附属
図書館長、アカデミッ
ク・リンク・センター
長、文学部教授

「読み、書き、静かに思考を巡らす空間」
からの変貌

赤木 かつては読み、書き、静かに思考を巡らせる空間であった大学図書館は、ICT (Information and Communication Technology) の普及や学習スタイルの変化に伴って、さまざまな変化を遂げています。図書目録はカードからOPAC (Online Public Access Catalog) に変わり、グループでの学習スタイルに合わせたラーニングコモンズの登場で、静謐な図書館は大きな変貌を遂げつつあります。また、最初は便利だと思っていた電子資料の価格高騰という新たな課題や、そもそも「本よりスマートフォンやインターネット」の学生たちは、なかなか本を読まないという現状がありま



司会

あかぎ かんじ
赤木 完爾

慶應義塾図書館長、
法学部教授、インター
ジェンスセンター
広報・情報部門会議
(大学時報) 委員

あおき しんじ
青木 辰司

東洋大学附属図書館
長、社会学部教授

かわち まさひろ
河内 鏡太郎

武庫川女子大学附属
図書館長、共通教育
部教授

す。これらが今の大学図書館が直面してい
る状況だと思っています。

これまでの学習の場としての大学図書館
の役割に、どのような変化が起こっている
のか。大学の教育研究活動を支える場とし
ての機能をいかに果たすべきなのか。本日
は、大学教育の多様化に対応する大学図書
館の課題を共有し、これからの役割や可能
性を探る機会にしたいと思います。

現場感覚が重要で、強く求められるのが 大学図書館

赤木 河内先生は武庫川女子大学において、
大学図書館を教育課程に組み込むという非
常に新しい取り組みを主導していらっしゃ
います。

河内 私は、元来は大学の教員でも研究者
でもなく、新聞社で社会部長や編集局長を
務めてきました。新聞社に在籍していた頃
は、「読者のために」「読者のまなざし」と
いうことをしきりに言われてきましたが、
実際に読者にじかに接することは日常的と
は言えませんでした。後輩記者から、大学
の図書館長と新聞記者と、どちらが大変か

聞かれたので、大学図書館では、学生が目の前にいるから大学であると答えたことがありましたが、それほど図書館は現場感覚が求められる重要な職場だと感じています。

図書館の素人であった私に何ができるかを考えたときに最初に思ったことは、「一人でも多くの学生に、図書館に来てもらいたい」という思いでした。同時に、図書館が学生にとって憩いの場であり、楽しみの場にもなることを目指して、「日本で一番、学生が訪れる館長室」を2年かかってつくりました。

今、私の部屋には1カ月に30〜40人の学生がやってきます。学生と一生懸命に話していると気が付くことが数多くあります。それをすくい上げていくのが新聞記者出身の図書館長の役割であると考えています。一例をあげますと、OPACのパソコンだけ、キーボードとマウスを緑色にし、その他の一般のパソコンはピンクにしました。これも、学生たちを図書館に呼びこむための一つの方策です。館内には130個のコンセントを設置し、学生が自由に使えるようにしました。今や新幹線でも喫茶店でも

電源を無料で使えるのに、授業料をとっている大学がなぜ無料にできないのかと、非常にシンプルな発想から実施したものです。何でも禁止の「ダメダメ図書館」ではなく、おしゃべりも飲食も充電も全てOKにしてみたら、学生はどう反応するだろうということからの出発でした。

大学全体の中での図書館の役割を考えるというよりも、どうすれば学生目線の図書館としての役割を果たせるかという観点から、さまざまな試みをしています。

学生が訪れ、書架をみて、 本を開く図書館づくり

赤木 明治大学は数年前に新しい図書館を開館されました。大学図書館には、従来の「資料の収集・保存・閲覧」を超えた機能を期待されるようになってきていますが、そういう変化についてどのようにお考えでしょうか。

林 2012年5月に開館した和泉図書館は、従来の図書館にはない新しいタイプの大学図書館を目指しました。以前の図書館にどのような問題や課題があったかは、実

際に学生に接してきた図書館員がいろいろな情報を持っています。そこで、それを新図書館の設計者に十分に伝え、建物に反映させました。できあがった図書館は、まず1・2階には学生がおしゃべりできるオーブンスペースがあり、情報リテラシーも設けました。そこは外からも中を見えるように透明なガラス張りになっています。3階は少し落ち着いた勉強するスペース。そして4階は教員が研究に使えるような静かな空間というように、1階のバブリックなスペースから、上階に行くに従って静かになっていくという「音のゾーニング」という構想を取り入れています。

学生の気質が変わってきていることもあって、何らかの方策をもって学生を図書館に呼びこむようにしなければいけないとよくいわれます。最近では「滞在型図書館」というコンセプトが話題になってきていますが、和泉図書館では3階にリクライニングチェアを置きました。たまに昼寝をしている学生を見かけることもあります。とにかく図書館に来て書架を見れば本を手にとって開くだろうということで、設備もか

なり学生本位のものにしました。

そうしたハード面とともに大事なものは、学生に情報リテラシー、もしくは図書館リテラシーをいかに伝えるかというソフト面です。明治大学では、図書館活用法という共通総合講座の授業を2000年から開講しています。さらに、ゼミ単位のツアー形式で、学生と教員が来館して図書館の機能の説明を受け、情報検索の実習を通じて、図書館がいかに自分たちの勉強に役立つかを実感させるということも積極的に行っています。先ほどご説明した情報リテラシールームは、そのための専用スペースです。図書館活用法の授業は、文部科学省の平成19年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択され、和泉キャンパスだけではなく、駿河台、生田、中野の各キャンパスでも、図書館員が教員と一緒にあって頑張っている状況です。

多様化する学生、変わる大学図書館の機能

赤木 青木先生、いかがでしょうか。

青木 18歳人口の減少という大きな流れが

バックグラウンドにあり、その中で私立大学の学生がいろいろと多様化しています。最近では学生の本離れが図書館にとつての直接的な課題として挙げられますが、学習支援が必要な学生も増えています。

それに対する答えの一つがラーニングコモンズです。各大学の図書館でかなり導入されているようで、学生に図書館という知的創造空間へのアクセスを促す上でかなり効果が上がっているという報告を、いろいろなところから聞きます。ラーニングコモンズは、図書館に足を運ばせ、図書館の機能に関心を持たせる入り口として、そして、図書館に一人でこもって深く研究するという今までの静的な在り方に対して、他の学生や教員とのコミュニケーションを通して自分の知的な創造力を高め、必要な情報を整理・蓄積していくことの面白さを経験する場としての二つの機能において、極めて高い効果を挙げています。

ラーニングコモンズに代表されるようなハード面と、先ほど林先生がおっしゃったゼミ生に対する図書館教育、さらに初年次教育といったソフト面が必要だと思います。

赤木 これまでのお話で、期せずして各先生からラーニングコモンズの話が出てきました。竹内先生は、大学教育と図書館の関わりについて非常に長い間、実践を重ねてこられました。先生から、ラーニングコモンズの動向を踏まえた上で、図書館機能の問題点についてご助言をいただけますでしょうか。

竹内 図書館の世界では、1990年代から、情報リテラシー教育や図書館リテラシー教育の必要性が盛んに議論されてきました。しかし、それはあくまでも図書館の中の議論で、それが大学全体に対してどのようなインパクトがあるのか、具体的にどのような効果があるのか、という議論はほとんどなかったと言っているでしょう。

それが脚光を浴びるようになったのは、「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」をはじめとする事業に各大学が盛んに取り組むようになり、その過程で、東京女子大学やお茶の水女子大学などで、大学教育において図書館がどのような機能を果たし得るのかという議論が起こり、ラーニングコモンズの構築が一つの大きな動きに

竹内 比呂也氏



なっていたからだと思います。

また、2013年に科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会がとりまとめた『学修環境充実のための情報基盤の整備について（審議まとめ）』において、「学修環境充実に関わる3要素（コンテンツ、学習空間、人的支援）を集約的に機能させているのは大学図書館である」とされたことも、大きなインパクトがあるものでした。そのあたりから、ラーニングコモンズは大学の教育施設として「あつて当たり前」という認識が普及したと考えています。

赤木 ラーニングコモンズを發展させた形が、河内先生が取り組んでいらつしやる、図書館を教育課程に取り込む仕組みですと

林 義勝氏



か、竹内先生が進めてこられたアカデミック・リンクであると思います。そしてその背景には、大学教育は教科書を学ぶことだけで完結するのではなく、いろいろな材料を用いて問題を発見しながら、皆で双方向的に教材を作っていくという考えを実践する手段の一つとして意図されているのではないかと感じました。

「本が好きというよりは人間が好き、そして社会が好き」な司書を育てる

赤木 武庫川女子大学では、図書館として、教育課程の実践をどのようにサポートし、主催しているのかについて、実践例をご紹介いただけますでしょうか。

河内 本学では、教務が担当していた司書課程にかかる業務を図書館が全て行うことにしました。司書という職務は、図書館業務と深く関わっていますが、司書の資格を取得して大学を卒業しても、今は希望どおりの就職が困難な状況です。しかし、しっかりと司書を育てることは、大学や大学図書館の大切な役割であると思います。

司書課程にかかるカリキュラムの編成やシラバスの作成、講師の依頼、学生の履修相談と、作業は膨大なものになりますが、司書課程で学んでいる学生数は500人に上ります。大学図書館を支える学生が少なくとも500人はいると考えることができるわけですから、この学生をしっかりと育てようというコンセプトのもと、「本が好きというよりは人間が好き、そして社会が好き」というテーマで学生といういろいろな取り組みを行っているところです。

学生には、司書に直接結びつくこと以外にも、図書館を活用してさまざまな経験をさせています。例えば、図書館サービス特論の授業では、ラブラドルレトリバーなど6頭を図書館に連れてきて、近くの小学

生を集めてR.E.A.D.プログラムという読み聞かせを行いました。これは米国などではよくやっていることですが、日本ではあまり見られません。学生には、イベントのコーディネートから当日の運営まで、すべて担当してもらいます。作家をお招きするイベントも開催しています。

また、行列ができるパン屋さんを図書館に呼んで1日に100食を販売するということもしました。パンはどのようなプロセスでできるのか、売り方はどうすればいいのかといったワークショップをパン屋さんで行う——そういった経験を通して、社会に対して極めて高い関心を持つ「本が好き、人間が好き」な司書を育てることも図書館



河内 鏡太郎氏

の仕事の一つではないかという考えです。
赤木 今のお話は、学習スタイルの変化と図書館の関わりといった面を含んだお話であつたように思います。竹内先生が取り組んでいらっしゃる図書館を新たな学習環境の構築の一環としてとらえているアカデミック・リンクについて、ご紹介いただけますでしょうか。

積極的・自主的・自律的な学びに資する「アカデミック・リンク」の取り組み

竹内 アカデミック・リンクを始めたのは2012年の3月であり、既に4年が経過しました。最初にスローガンとして掲げたのは、「考える学生の創造」ということで



青木 辰司氏

す。当時からアクティブラーニングが一つのキーワードになっていましたが、座学で受動的に講義を受ける形から、どうすれば学生たちが積極的・自主的に学ぶように変えていくことができるか、さらに、学生の自律的な学びを基本としつつ、図書館が提供するコンテンツを活用して生涯学び続ける力をいかに身に付けさせるかが、大きな課題になると考えていました。

ちょうどその頃、2008年の中央教育審議会によるいわゆる「学士課程答申」以降のさまざまな議論を受けて、学生の学習時間をいかに長く確保するかといったことが政策的にも言及されましたので、私どもの試みに非常に注目をいただきましたが、



赤木 完爾氏

われわれは、コンテンツと学習空間と人的支援という3つの要素の有機的結合ということを初期の頃から言って取り組んできました。そこで中心になった考え方は、学生に対して、自分が学びたいことをいかに見つけさせるかであり、そのキーワードは「多様性」です。

河内先生が「ダメダメ図書館にはしない」とおっしゃいましたが、まさにそのとおりで、多様な活動を包括し許容しながら、学生が自律的に学ぶことの楽しさに気付いてほしいということを意識してやってきました。その具体例として、どこからでも見えるようなガラス張りの空間を図書館内に設けました。完成したときに学生が「国立大学の中に私立大学ができたみたいだ」と言ったほどで、伝統的な図書館のイメージを一度壊すことが必要だと思い、建物の名称を学生から募集したり、コンセプトビデオを作ったり、マスコットを公募したりもしました。

こういったことが、かなり功を奏したようで、毎週火曜日と金曜日の昼休みに、図書館のエントランスにあるプレゼンター

シヨンスペースで開催している30分のシヨートセミナーは4年間続いており、延べ120名の教員が登壇しました。単にセミナーを開催するだけでなく、それが図書館が提供するコンテンツの利用に結び付くように、その日のテーマにふさわしい資料をブックアップして展示したり、ブックリストも作ったりします。さらに、セミナー自体をコンテンツ化し、図書館で貸し出しているタブレット端末で後日であっても見られるようにしています。

赤木 昔の図書館から何が変わったのかを考えると、先ほどからのお話で出てきているアカデミックコモンズへの変化やアクティブラーニングに資する場合への変化なのか、それらにプラスして、図書館が学生の変化に対応するプロセスで変わらざるを得なかった面があるのでしょうか。

**学生の多様化、学びの内容・質の変化に
対する図書館発信による取組方策の提示**

林 私が明治大学に勤務し始めた30年前を思い出してみると、図書館の施設は本当に衰えたものでした。しかし、そういう状況

でもきちんと勉強する学生はいたわけです。学生の質が変わってきたことに対して、昔ながらの在り方では教育の質を維持、高めることはできないとの認識のもと、文部科学省からもいろいろな報告や答申が出ているのだと思います。

同時に、教員自身も何とかしなければいけないと考え始めたということの表われでもあると感じます。先ほどご紹介した図書館ゼミツアアは、図書館の活用法や情報リテラシーの必要性が話題になるかなり以前から必要に迫られて実施していたもので、それが多くの先生方に広がってきました。その背景にあるのは、学生の質の変化です。

竹内先生からご紹介のあったシヨートセミナーのようなことを、われわれも行って、生田キャンパスの図書館のエントランスでは、昼休みに教員や大学院生が研究内容を紹介し、図書館の職員が内容に関連する本を並べるなどして、図書館に対する関心を目覚めさせようとしています。

さらに、例えば理科系の学部学生に文科系の教員の話を聞かせるといったことが積み重なっていけば、非常に大きな効果があ

ると思います。自分の専門分野のことだけを知っていればいいかというと、そういう時代ではない。大きいえば教養教育を兼ねる形で図書館が対応していけば、単に学生が変わったから図書館も変わるという受け身の話ではなく、もっと積極的な役割を図書館が果たせるのではないかという気がしています。

青木 学生の多様化、変化が、大学図書館変革の要因になっているという点については、特に私立大学は学生がいてこそ経営が成り立つという面がありますから、紛れもなくあると思います。

学生の多様化、変化に関わって、私が特に気になっているのは、大学に来ても誰とも話さず、好きなように時間を過ごせればいいという学生から、図書館を一種の「逃げ場」として利用するというニーズが見られることです。逆に、おしゃべりが好きな学生は、図書館のラーニングコモンズで時間を忘れて友人と話し込むというように、学生と図書館のいろいろな接点が生まれ始めています。学生がなるべく孤立化せず、人とつながったり、コミュニケーションしなが

ら自分の能力を高めていくパブリックな場として、大学図書館は今後ますます重要になっていくし、そのような場は飲食もOK、おしゃべりもOKというように、図書館側のサービスが多様化してきたと思います。

変わる図書館

司書、図書館員に求められる資質とは

青木 東洋大学には以前は司書課程があり、

日本で最も多くの司書を輩出していました。それをやめてしまったという経緯があります。武庫川女子大学はその対極にあつて、従来とは違う、新しいタイプの司書を育てていらつしやる。しかも、河内先生のお話をうかがっていると、ソーシャルコディネーター的な役割も果たすような司書を目指されていらつしやるのではないかと感じ、これからの図書館には、以前からある機能をベースにしつつ、もっと多様な、新しい役割を担ってコディネートできる人材が必要なのだと感じました。

本学は、昨年の認証評価において、司書が少ないとの指摘を受けました。これから司書を増やすことは現実的ではありません

ので、指摘に対しては、本学の派遣職員は、全員が司書の資格を持っており、司書機能は、図書館として十分に果たしている。大学職員の採用に当たって、図書館業務しかできない、司書としての仕事しかなかったという人材を採用することはあり得ず、多様な部局で活躍できる人材が必要であつて、他の部局での経験が図書館の仕事に生かされるようなマネジメントの資質を持った人材を育てていくとの説明をして、理解いただきました。

これからの司書機能をどう考えるかということ、図書館員に求められる資質について、私は非常に関心があります。

赤木 お話をお伺いして感じたのは、学生の変化に応じた環境整備としてラーニングコモンズを設けるだけではなく、図書館の活用を通じたアクティブラーニングの実践などにより、図書館の利用状況に変化が見られるようになった。そしてそうした図書館の有する機能の変化のお話は、来館者数を指標とするお話とはまた違った側面の機能についてのお話であるように感じましたし、青木先生のお話からは、図書館員に求



められるスキルが変わってきたのではない
かという印象も強く持ちました。

図書館を取り巻く環境が変化する中で、
柔軟性があつて、社会人に求められるコミュ
ニケーション能力や学生とすぐに話をして
良好な関係を築けるような社交性といった
資質が図書館員にも求められるようになって
きているように感じるのですが、いかが
でしょうか。

竹内 今の学生がいろいろなニーズを持っ
て、あるいは多様なバックグラウンドを有
する中で大学で学んでいるということを考

えたときに、それを支援する図書館員が従
来の司書の仕事だけをしていては不十分だ
というご意見は、全くその通りだと思います。
図書館がこれまでやってきた「収集、
整理、保存」という仕事は、電子的な資料
が増えることによって、その比重が下がっ
ていることも事実です。

しかし、そういった面に関する知識がゼ
ロであっても、図書館が学生のために行っ
ている業務を担当できるかというところ、それ
も違うと思います。

つまりはスキルの適切なコンビネーショ
ンが重要で、スキルを組み合わせることに
よつて図書館の機能が一層向上し、学生に
とつて利用しやすく、学生の学びをより強
力にサポートできる図書館に変貌するの
ではないかと思っています。

学内の構成員は 図書館をどう見ているのか

赤木 先ほど、情報リテラシー教育という
言葉が出てきました。これについて考えて
みると、まず問題を発見するのは学生であつ
て、学生が問題を発見したところから図書

館のサポートが始まるということがいえる
のではないかと思います。

そうなると、図書館にかかわる問題だけ
でなく、職員と教員とのコミュニケーション
や接し方、学生ニーズの受け止め方とい
う課題も出てくるように感じますが、学内
の構成員は図書館のことをどのように見て
いるのでしょうか。

青木 図書館員と教員の関係性という意味
では、東洋大学では、各学部で教育用の図
書予算を配分しており、図書館運営委員が
中心となつて、教員の専門分野の本の中か
ら、これはぜひ図書館に入れておくべきと
いうものを選んでいただきます。しかし、
図書館員が既に選んでしまつた後であるた
めに、教員からの推薦が徒労に終わるとい
うことがあります。そうなりますと、最初
から図書館員が全部やればいいではないか
という極論まで出てくるようになってしま
うことがあります。しかし図書館員に、学
部の専門教育にふさわしい本を判断する専
門性が担保されているかというところ、必ずし
もそうではありません。

林 明治大学には、各学部から教員が参画

する図書委員会が置かれており、同委員会の委員が専門書などを選択する際は、図書館に来て選びます。ですから、図書館の職員と教員との協力関係はうまくいっているようで、何か問題があるという話は聞いておりません。

青木 限られた予算と空間の中で、学術情報としての文献をどのように効率的にストックするかというのは、電子媒体と違ってなかなか難しい問題ですね。

学習支援のための図書館員と教員との 関わり方の接合

赤木 米国の著名なロースクールでは、ライブラリアンが法曹資格も持っているケースが多いようですが、日本の大学で主題別にライブラリアン（図書館員）を用意できるかという点、ほぼ無理だと思います。

小樽商科大学では、クラスライブラリアンという制度があつて、1学年に対して一人のライブラリアンが、その学年が卒業するまでずっと担当し、図書館に関連することのすべてを面倒を見ているとのこと。こうした取り組みは、ある意味でサブジェ

クトライブラリアン（主題専門図書館員）であつて、小規模な単科大学だからこそできるのかもしれませんが、学習支援と図書館と教員の関わり方の接合を考えた、非常に良い試みだという印象を受けました。

竹内 サブジェクトライブラリアン制度は、米国の大規模な研究大学では制度として強く残っているものの、それ以外のところではむしろ弱体化しているのが現実のようです。というのも、リーマンショック以降は、米国の著名な私立大学も経営難に見舞われており、例えばハーバード大学では1200人いた図書館員が850人くらいにまで減っている状況です。

サブジェクトライブラリアンほどではなくとも、図書館と学科をつなぐ担当者という形で図書館員が機能することになっていけば、先ほどの選書の問題でも、図書館員が学科の教員に相談できるようになるといったことは考えられます。

千葉大学の図書館では、2007年からリエゾンライブラリアンという試みを行っています。「授業資料ナビ」という、特定の授業に合わせたパスファインダーを教員と

職員が協力して作っています。担当する職員を学部ごとに決め、授業担当教員とコンタクトをとり、個々の授業に適した資料を推薦する役割を担います。教員からすると、図書館員がそこまでやってくれるとは思っていなかったのが驚きますし、図書館員が提供するもののクオリティの高さに再度驚くということがあり、とても高い効果を生んでいます。教員は、図書館のことで何か困ったらその職員に相談するという学内カルチャーが少しずつ生まれており、図書館と教員および教育プログラムの関係を変え、大きなきっかけの一つになるのではないかと期待しています。

林 明治大学でも、今はシラバスに参考図書が必ず挙げられていますので、それを全て図書館で用意して、シラバス本と称して1カ所に集め、分かりやすく提供しています。教員と実際にコミュニケーションをとっているかどうかとは別に、シラバスを介した教員と図書館員の協力関係の構築はあり得るといえます。

青木 今のお話は、選書に限ったお話というよりも、学生に対する学習支援において

図書館が果たす役割にもつながるお話であると思います。今は、図書館に携わる職員の間でも、図書館として学習支援をしていなくてはならないという意識を持つようにはなっていると思います。しかし、教員側にそれを受け止める素地がないと、余計なことはしなくていいという話になってしまう可能性もあります。

一方、教員の方でも、授業に関連するもの以外の業務が増える中、授業準備に関わる部分で図書館がサポートしてくれるならばありがたいという気持ちがあると思います。そうした気持ちも、もっとサポートしてほしいという意識に変わっていけば、教員側の図書館に対する理解も一層深まっていくはずです。図書館としても、学生に対する学習支援に関わる業務の中から、現実的にやれるところから徐々にでもアプローチしていく取り組みが必要だと思っています。

赤木 全く同感で、四半世紀前でしたら、学生は属している研究室などの若い教員や大学院生から、いわば伝承的に図書館の使い方を教わったものですが、近年は、特に若い研究者は早く業績を出さなくてはいい

ないという切迫した状況にあるので、学生の気付きを促すというところまではなかなか手が回らない現状があります。そうした状況の中、教員と図書館との共働によるサポートを得ることができれば非常に助かると思います。どの大学でも、教員は教育研究以外の業務が飛躍的に増えているので、大学としての総合力を考えるときに、教員と図書館のしっかりした協力関係は不可欠でしょう。ただこれも、図書館の専門性を持った職員と教員との継続的なコミュニケーションがないと成立しませんから、そういう場を双方が積極的に作っていくという試みが重要だと思っています。

学習支援における外部資源 (業務委託、派遣職員等)の関わり

河内 本学の図書館の専任職員は私を入れて5人で、うち3人が司書です。そのほかに司書資格をもつ委託職員が30人います。この業務委託の是非については、大学によっていろいろな問題や課題を抱えていると思いますが、本学の場合には司書のリーダーを務めている女性が国内外600以上の図

書館を見て回った経験を持つ非常に優秀な方で、新しいことにも積極的にチャレンジする方なので、彼女の教えを受けてスタッフが育っていくという仕組みができています。私も、委託職員の30人をしっかりケアするようにしており、毎朝全員でミーティングを行います。委託職員が新しい企画をつくったら、検討して実施していますし、SD (Staff Development) 研修にも一緒に参加しています。委託職員が動いてくれないと、専任職員だけではどうにもなりませんから、委託職員をはじめとする外部のリソースとの協力やマッチングが非常に大事な時代になってきていると感じます。

赤木 従来からの紙の資料に加え、電子媒体による資料が増えてきました。これは図書館のスペースの節約にはなるものの将来像は不明です。電子と紙のバランスについてはどのようなお考えをお持ちでしょうか。

竹内 私は、エンドユーザーが望む形で提供するというのを基本思想として持っていますので、コンテンツがどのように管理されていようと、紙でほしい、あるいは

電子でほしいといった場合に、それに応えられることが理想だと思います。ただ、そのためには莫大なコストがかかるので、どのように実現するかについては別の視点からの検討が必要になるでしょう。

既に電子化が進んでいる米国の現状を見ますと、紙の資料については明らかにシェアードプリントの概念が確立したと思います。2013年の科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会による審議まとめにもあるように、紙の資料は残す必要があるものの、全ての大学で同じように残す必要はないのではないかと考える方を基本とした方向性は今後ますます強まっていくと考えています。

赤木 シェアードプリントというのは、例えば図書館同士が連携する中で、ある書籍はどこか一つの図書館が持っていればよくて、他の図書館はそのぶんの資源を他に有効利用しようという考え方ですね。

竹内 それをドラスティックに進めると、米国のある大学のように、紙の資料の95%をキャンパス外の書庫に移すというところまでいきます。日々の利用は完全に電子

媒体で、紙の資料が必要になったら書庫から翌日配送で届けられることが保証されるというシステムです。日本の場合は、和書の電子化が極端に遅れているといった状況があるので、そこまで踏み切れていないのが現状です。

赤木 シェアードプリントのお話に関連しては、大学図書館同士の協力という意味では、明治大学と東洋大学を含む8大学が山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムを運営されていますが、これも使いようによってはシェアードプリントの導入を考えることができますね。

河内先生から、図書館業務の外部委託にかかるお話をご紹介いただきました。これは各大学の予算規模にも密接に関わる内容でもあり、一般的な正解はないと思います。一方で、図書館の機能に習熟したコアになる専任職員が絶対に必要であることも間違いありません。

図書館の機能や役割を考えたときに、外部に業務委託をすることの問題点についてどのようなお考えをお持ちでしょうか。

林 明治大学では、図書館員の3分の2は

業務委託によるスタッフです。法人として図書館専任の職員の採用はしていませんので、たまたま図書館に配属になった職員がベテランの職員から教えてもらって司書の資格を取り、長く勤務しているケースもありますが、逆に、業務委託によるスタッフのほとんどは司書の資格を持っています。

図書館は土日も開館しており、年間で約340日開館していますが、特に日曜日については、財政上の問題に鑑みても業務委託のスタッフにお願いするしかないこととなります。限られた予算の中で、業務委託の費用をどこから捻出するかについては、かなり神経を使っています。

専任職員が担うべき図書館業務とは

林 専任職員の数を一定程度保つことが図書館の質の維持につながることは、理解はしています。しかし、学生の質の変化に応じて図書館の対応が変わってきたのと同様に、業務委託の増加という変化の中で、専任職員に求められる役割も変わってきました。先ほど青木先生がおっしゃったように、

司書とは別の能力も持った管理職者が図書館全体の運営をするようにするということを、これからは真剣に検討しなければいけないと思っています。

先ほど出た、電子媒体と紙の問題についても、学内で電子化できるものは全て電子化しようとしても、それを可能にする予算は到底ありませんので、図書館全体、国家全体の問題というレベルで考えないことにはどうしようもありません。

青木 本学の図書館も、職員と外部委託の割合は明治大学と同じくらいです。3分の2を外部のスタッフに委託することの是非は微妙なところですが、私の2年間の図書館長の経験から感じていることは、決して悪いことではないという思いです。例えば、学生が図書館のエントランスに入ってきたらおはようございますと優しく声をかけようということを言っています。まずそこからコミュニケーションが始まるわけです。こういった基本的なことであればあるほど、得てして専任職員には徹底できないものですが、業務委託のスタッフはきちんとやってくれるなど、業務委託のスタッフの方が

機能的にやっていた部分があるのは事実です。

そうなると、図書館の業務をどんどん委託していつて最後に残るコア業務とは何かを突き詰めて考えていきますと、これが今、非常に重要な課題になっています。

東洋大学の建学の理念の一つに「諸学の基礎は哲学にあり」があること、一方で文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援に採択されているといったことを踏まえ、そうした大学にある図書館の理念をどのようにに組み立て、どのような課題を設定し、取り組んでいくのかといったことは、やはり専任の職員がしっかりとやらなければなりません。さらに、マネジメントの部分や他の部局との連携によるプロジェクトの立案・実行といったこともなかなか外部からのスタッフにはできないと思います。こういった業務の仕分けをしつつ行いたうえて、外部に委託する部分はもつと徹底し、業務のクオリティを職員以上に高めてもらえるように求め、一方で、職員にしかできない部分はもつとしっかりと組み立てなければいけません。

また、個人的には、私立大学間で職員の相互派遣ができないかということをや前から考えているのですが、なかなか実現できずにおります。

大学図書館における財務・人事上の課題

赤木 図書館の財源に関わる問題については、大学の規模や置かれている環境によって異なりますし、単科大学が総合大学かといった面でも様子が様々であると思われます。ただ、財源問題にかかわって、大きくて共通の悩みの一つは、電子書籍の高騰があると思われます。

明治大学は規模が大きく、理系の学部もあります。この問題についてはいかがでしょうか。

林 明治大学全体の図書費の約65%が電子ジャーナルを含む学術雑誌費に費やされてしまっており、特に文科系の先生方の研究用図書費がどんどん圧迫される状況にあります。大学の財政は厳しく、予算の上限が決められている上に円安や消費税増税の影響を考えると、何らかの対策をとることが

喫緊の課題となっています。

本学では2年前に、オランダのエルゼビア社が提供している学術雑誌のパッケージ契約をやめて個別に購入するようにしたところ、予算が年度末に残って翌年に繰り越すことができました。さらなる方策の一つに、オープンアクセスの考え方がありますが、そこまでいなくても、今後は、学内に機関レポジトリを設けて無料でアクセスできる体制を作るなどしていかないと、知的財産の利用が特定の企業に左右される状況になるおそれがあるといった問題も生じ



得ますので、これから取り組むべき重要な問題だと思います。

赤木 電子媒体については、国公私立大学の図書館および国立情報学研究所による連携協議を通じて大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）が設立され、同コンソーシアムが大手電子出版社との窓口となつて、単一のナショナルライセンス的な契約ができないかという交渉をしているところなんです。ただ、価格上昇を抑える一定の効果は期待できても、大幅に下がることはないでしょう。これらは私立大学だけの問題ではなく、国全体で考えるべき問題であるといえましょう。

先ほど、青木先生から、人材にかかわつてのご指摘の中で、図書館業務に精通した専任職員が必要であるというご意見には私も賛成です。昔と違い、私立大学といえども人事担当者はゼネラリストを採用していますが、それに対して図書館の側は、図書館業務に専念し、精通することできる、スペシャリスト的な人材を求めたくなるものですが、こうした人事政策上の課題に取り組む際のいいアイデアはないものでしょ

うか。

国立大学の場合、ある大学の図書館から他大学の図書館へ移ることはあっても、図書館から他の部署に異動することはあまりないような印象があるのですが、そのあたりの実態をご紹介いただけますでしょうか。

専任職員の「学生目線」点検の場、 スキルミックスの場としての大学図書館

竹内 国立大学では、確かに他部署への異動は少なく、また、法人化以降は「その大学法人の職員」という意識が強くなり、図書館員がさまざまな大学の図書館のポジションを動くというケースも以前より減っています。ある水準以上の図書館サービスをとどの図書館も提供するという環境を維持するという観点からは、このような変化はマイナスに働く可能性が高いと思います。

一方で、大学のマネジメントの一端を担う人材は、大学全体の動きも理解しないといけないわけで、図書館のプロというだけではもの足りないのも事実であり、そのバランスが非常に難しいと思います。

例えば、あの人は大学のいろいろな仕事

を経験しているが、根っこは図書とか学術情報のところにあつて、そういった専門的な知見を発揮して大学全体を見ながら仕事ができるといったように、ゆるやかな専門性のようなものを大学の中に作る工夫をしていかないと、これからは立ち行かなくなるのではないかと思います。

青木 私が考える「あるべき職員論」の議論でとても重要なポイントは「学生目線」です。これは学内の全員に求められていることです。そこで、例えば新入職員は図書館で5年くらい学生にじかに接しながら仕事をしてスキルアップをした後に他の部局へ移る。あるいは中堅職員が図書館に来て、それまでの自分が本当に学生目線で仕事をしてきたかどうかを自己点検し、元の部署に戻るといったように、図書館が職員のスキルミックスの場になるということを、人事担当者にはぜひ理解いただきたいですね。そういう柔軟な発想で人事を考えてもらえれば、ゼネラリストかスペシャリストかという両極の議論を超えられるのではないのでしょうか。

河内 私が図書館に来て後、図書館プロパー

の方のうち6・7人に異動していただきました。以前は本学の卒業生が図書館の司書としてカウンターに立っていたので、どうしても先輩が後輩に接する形で学生に接していたのを少し変えてみただけで、来館者は増えました。

また、図書館のワンフロアに就職と資格の本だけを1万冊集めたところ、学生に圧倒的な人気を博しました。また、図書館の中にある非常におしゃれなライブラリーカフェで、オープンキャンパスに参加した親子が楽しそうに記念写真を撮っていたりするのを見て感じるのは、大学は「学生目線」というものを本当に理解しているのかということだと思います。学生目線で考えるということには決して簡単なことではなく、教職員が死にもぐるいになり、地をほうような努力をして初めて実感できるのではないかと思います。学生とじかに接する時間を積み重ねることによって学生に対する理解を深める、そういった教職員が増えることが、これからの図書館の在り方と大いにリンクしてくるような気がします。

青木 今のお話をお聞きして、耳が痛いの

ですが、本学の図書館の事務部は2階にあつて、学生に笑顔で接しているのは、実際上は業務委託のスタッフであり、学生に接する機会が少なくなりつつある図書館所属大学職員が、学生サービスの向上に対して、直接・間接にどのような面で貢献できるかが問われていると、感じております。

理想の大学図書館像

赤木 それでは、最後に理想とする大学図書館像についてお聞かせください。

青木 メインテーマは「閉ざされた空間から開放系へ」です。東洋大学は学生のグローバル化対応を迫られているという事情があり、増加する留学生に対して職員が英語で対応したり、留学生が読みやすい日本語の文献を整理してきちんとサポートするといったことについての課題が少なくないと思います。

「開放系へ」のもう一つの意味は、他大学との図書館職員の交流です。職員同士が研さんを積む機会を増やし、人事交流ができるようになればおもしろいのではないで

しょうか。

都心の大学の場合はキャンパス環境がどうしても制限されますので、ある意味で図書館が学生にとって唯一のよりどころ、居場所になる。武庫川女子大学のような楽しい空間、ホッとする空間づくりも必要だと思います。

河内 図書館員が行動するということは、図書館そのものが常時アクションを起こして学内のプレゼンスを高めていくことにつながります。実際に入館者が増えてくると、図書館に対する法人の見方がガラッと変わります。ただ、学生の支持がなければ図書館が存在できないことは確かです。学生の声を受けて、本学の図書館は4月から閉館時間を夜の9時半まで延長することになりました。そのために全学の下校時間も9時半に移行するといったように変わります。

林 図書館はこれまで、いろいろな意味で大学の中心でした。研究の面ではリサーチライブラリーというのが一つのあるべき姿だったと思いますが、最近はそのただけではなく、学生サポート、それも特に念頭に置

くべきは1・2年生に対するサポートです。図書館を十分に活用させることによって、普段の授業では経験できない、外の世界に目を開かせることができるのですから、教養豊かで、国際社会で十分に通用する人材となるための資質の種をまくという意味で、文化の拠点ともいえるべき機能を図書館が果たすようになるのが、私の理想像です。

**「知」の共有、創出、記録、継承、利用
大学図書館の問題Ⅱ大学全体の問題**

竹内 大学図書館だけで理想を語るのとはや難しくなってきたており、大学そのものの姿と大学図書館の姿がシンクロしてくる部分があるのではないかと感じています。大学も大学図書館も、これまでの姿がそうであったように、知を共有し、創出する場であると考えると、図書館が果たすべき機能は、過去に果たしてきた機能や今果たしている機能を、学生の姿や気質、情報通信技術の変化を踏まえながら、将来もきちんと果たし続けていくことにほかならないと思います。

大学図書館は、知というものが、たとえ

どのようなメディアに記録されていようと、過去に生み出された知を記録、継承、利用可能なものにする環境を保ちつつ、次の世代につなげていくという使命だけは決して変わることはないと思います。

その意味で私は、ラーニングコモンズをめぐる今の盛り上がりだけに目を奪われてしまうと、図書館としての本質を見失うのではないかと危惧を抱いています。

「図書館がやらないから悪いんだ」といって何もしない大学職員や、「そんなことは図書館の仕事ではない」という図書館員を超えて、大学図書館の問題は大学そのものの問題であるという共通理解のもとに、先に進んでいくということが必要なのではないかと思っています。

赤木 高校生が大学を選ぶ際に、素晴らしい図書館があるからあの大学へ行きたいというケースがもつと増えることが大学図書館の未来であってほしいし、それを目指したいというのが私の偽らざる気持ちです。本日は啓発的なお話をたくさんいただき、ありがとうございました。